

「With コロナ」での生活

早瀬 武雄

今年の2月に新型コロナの感染拡大を心配して3月と5月の旅行を早々にキャンセルをした。その後は楽しみを先に送り「With コロナ」の生活を送っている。

東京・神奈川の感染者を気にしながら食糧買い出しに出かけている。6月に感染者数が減少し、そろそろ出かけられるのではと、鳥取・島根、(松江城・宍道湖・出雲・大原美術館・境港の3泊4日の企画をした。

パソコンに向かうと電車・バスの時刻が分かりホテル・旅館、観光案内所までわかり企画の時間は有意義である。注意しなければいけないことは飛行機の運行である。又、出発等の時間が決まらないのでどうしても電車での企画になってしまう。

この企画も新型コロナ感染第2波の影響で中止した。

その後、昨年企画した「常磐線全線開通記念！」3泊4日の企画を見直していたところ、長谷川会長から自ら編集した「みちのく黄金街道をたどる」の冊子を頂いた。

長谷川さんは岩手県立大船渡高校(盛高校改称)出身で故郷の歴史に関心をお持ちである。(ロッテ球団、佐々木朗希投手は高校の後輩にあたる。)

この冊子のはじめには、『最近まで、正直言って「日本遺産」と聞いて「何が日本遺産になっているのか、何処にあるのか？」知らなかった。だが、日本にある世界遺産は？と聞かれると何やらすらすら出てくるのに、「日本遺産」については何一つ出てきませんでした。

まずは、「日本遺産とは」を学びながら、故郷の日本遺産を呼び起こしてみます。「日本遺産登録」として、「みちのく GOLD 浪漫 - 黄金の国ジパング、産金始まりの地をたどる-」が、令和元年5月20日に文化庁より発表されたという情報を新聞で知りました。「みちのく黄金の話」は、懐かしき故郷伝説として頭の片隅に残っているので、振り返って見ることにして「みちのく黄金街道をたどる」と題して、日本遺産のロマンを掘り起こしてみることにします。

日本の「金産出の歴史」は、みちのくから始まっている。』と書いている。

この時期、私は、みちのくに関係する「冬を待つ城」安部龍太郎著を読んでいた。「九戸政実の乱」を描いた小説である。

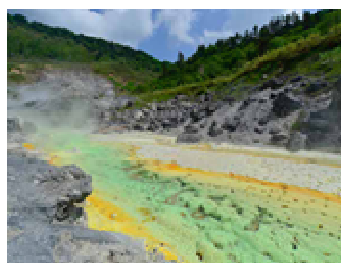
天正19年(1591年)に奥州北部(南部地方)で起きた騒乱が「冬を待つ城」の舞台である。その背景には、豊臣秀吉による天下統一とその後の朝鮮出兵が存在する小説である。

「この小説の中で秀吉の大軍に対し5千の兵で戦うにはそれ相当の財力がなければ戦えない。即ち、「みちのくは黄金の国」なのである。又、気になるのが鉄砲に使う

良質の硫黄があったのである。」

日本は火山国

「硫黄からみた日本史と世界史」(神戸女子大学准教授 山内晋次)によると、10世紀末から13世紀後半にかけての日宋貿易を通じて、日本から中国に硫黄が輸出されていたことは、既知の事実である。そして、現存する諸史料を見る限り、日本産硫黄の中国への輸出は、この日宋貿易の開始とともに始まるようである。では、なぜこの時期から硫黄輸出が始まるのであろうか。この疑問を解くカギは、中国における火薬および火器の発達の歴史にある。火薬は唐末9世紀の中国で発明されたと推定され、それは硝石・硫黄・木炭粉を主原料とする黒色火



湧き出た温泉(玉川温泉)

薬であった。そして、これ以後、中国において火薬の武器への利用が進められ、火砲箭などさまざまな火器が生まれた。

このような火器が大きく発展するのが宋代

である。

ただ、このような火器の使用拡大の一方で、宋代の中国には致命的な問題が存在した。それは、火薬の主要原料である自然硫黄を産出する火山が領域内にほとんど分布しない、という事実である。とくに、北方の金の圧力により、支配領域を大きく南方に偏らせていた南宋においては、この問題はいつそう致命的であったはずである。つまり、火器の利用が拡大する一方で、その主要原料の一つである硫黄の国内自給ができない、という矛盾した状況だったのである。そこで、宋の人々が硫黄の有力な輸入先の一つとして目をつけたのが、火山国・日本であった。そして、日本からの海を越える輸入を可能にしたのが、宋代中国で大きく発展した海上貿易という手段であった……。

東北は火山が多い

東北地方には18の活火山(地図中の△)がある。

東北地方の火山は関東や九州の火山と比較して、目立った活動が長期間にわたって見られない(静穏期が長い)為に、「火山の近くに住んでいても火山だと認識していなかった」り、「もう噴火しないと思っている」人も多いかもしれません。また、観光地になっている為、「噴火するなんて考えたくもない」といった人もいるかもしれません。しかし、歴史をひも解けば、有史以降における日本で最も大規模な噴火は、十世紀の十和田火山の噴火であると言われてますし、1888年の磐梯山の噴火(水蒸気爆発)では、山体が崩壊し、檜原湖等の裏磐梯の湖沼群

を形成する等、大規模な活動が起こっています。今現在、表面上活動が見られないからといって、将来にわたって噴火しないとは決して言えないのです。



東北大学院理学研究科附属地震
・噴火予知研究観測センター

東北地方の活火山には、磐梯山の他にも山体崩壊を繰り返して起こした火山が多く、ひとたび大規模な活動が起これば、被害は甚大なものとなります。自然地震を用いたトモグラフィでは、マントルウェッジ中に火山フロントに向かって、高温で部分熔融して

いる上昇流と解釈出来る低速度域がイメージされています。

この様に硫黄を埋蔵されていた岩手県松尾鉱山や秋田県玉川温泉等が有名であるが、その他にもたくさん硫黄を産出したところがあったようである。

みちのくの黄金

奈良東大寺の大仏は聖武天皇の発願により、律令国家が膨大な国費をつぎ込んで完成した一大事業でした。

天平 21 年(749)の早春、大仏本体の鑄造が秋には完了するメドがたったというのに、仏体を鍍金する金の量が決定的に不足していました。遣唐使の派遣も検討されるほど深刻な事態でしたが、その 2 月、絶妙のタイミングで陸奥守百済王敬福(むつのかみくだらのこにきしきょうふく)より、小田郡で黄金を発見したことが報告されたのでした。

このことは『続日本記』に「陸奥国始めて黄金を貢る。ここに幣を奉りて幾内・七道の諸社に告ぐ」と記されています。この報せに政府は歓喜し、大赦、2 度の改元(天平感宝・天平勝宝)、さらに田租・調庸の減免など次々と喜びの政策を打ち出しました。百済王敬福をはじめ官人への叙位も大々的に行われ、現地人など産金功労者への叙位もなされました。

同年 4 月、天皇は東大寺に行幸して、黄金産金を大仏に報告しました。金は、国内にはないと思っていた。

それなのに待望の金が「陸奥国の小田郡に出た」、まさに神仏の加護によるものだ、と喜びを述べています。

また、越中守として任地にあった大伴家持は「天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に金花咲く」と歌い、「万葉集」に遺しています。

勢いに乗った政府は、黄金調達を確かなものにするため、天平勝宝 4 年(752)、多賀

城以北の諸郡に金の貢輸令を発して、いよいよ鍍金を開始しました。仏顔から始められ、日毎に金色の輝きが増す同年 4 月、聖武太上天皇・光明皇太后・孝謙天皇親臨のもとに、世紀の”大仏開眼会”が盛大に挙行されました。

天平 21 年 (749 年)、百済王敬福が献上した金の産出地は”陸奥国小田郡出金山=黄金山”です。“黄金山”といえ、今日では黄金山神社付近の小字名ですが、天平の産金地の黄金山は篁岳山(ののたけ)塊の全体を指すものと理解される。

その黄金山神社付近や成沢地区の地形が韓国の溪頭の産金地と実によく似ていると言われ、「モチ石」が沢山あります。”モチ石のあるところに金がある”という白い石は、金を含むことのある石英塊です。産金功労者である百済王敬福以下の渡来人は、故郷の産金地に似た地形やモチ石を発見して、産金に大きな役割を果たしました。さて、大仏の鍍金方法は金を約 5 倍の水銀に溶かして作った金アマルガムを銅像の表面に塗りつけ、木炭などで 350 度ぐらいに熱することで水銀を蒸発させて金を銅の表面に焼き付けるものでした。

高さ約 16m の大仏は、仏体の表面積が 527 平方メートルあります。1 平方メートルあたり 111g の金が必要で、全体量はなんと約 60kg になります。

百済王敬福が献上した金は 900 両(約 13kg)、必要量の四分の一にも達していませんでした。そのため政府は黄金貢輸令を発したのです。これによって、黄金山での産金経営はフル回転を迎えたことでしょう。

陸奥の金は 16 世紀ごろまでは砂金で、黄金山の砂金は、北上山地を供給源として堆積した含金礫層と見られています。その金の純度は極めて高く、粒も比較的小さく角の丸いのが特徴で、アマルガム法による鍍金用の材料として優れていると指摘されています。

砂金取りは単純な個人単位の作業ですから、産金の量は大量の労働者をいかに効率よく長時間働かせるかがカギとなります。国府の役人が国家権力で指揮監督することで一大ゴールドラッシュを招いたことでしょう。

自由な時間を楽しむ旅行の机上企画から地域の情報・歴史等を知る気付けが出来、有意義な時間を過ごしている。韓国ドラマを見て倭寇の話や硫黄の話が出てくる。又、半島から多くの人が亡命し、朝廷に仕えた者もいて大仏鍍金のための金を発見した話など興味が沸いた。

歴史はその時代の権力者が書き綴って伝わっている。ある意味で都合の良い様に記されているのもあるようだ。

最近ではその歴史の見直しが少しずつ行われ、多くの資料と客観的な考察が行われている。

今回のコロナ感染問題も、「新型コロナ対応・民間臨時調査会」は、政府の対応が「場当たりの」だったと報告している。私たちはマスコミの報道だけでいろいろ解釈するが、大きく違っていた。

どの報道を信じればよいのか難しい時代である。じっくり考察する時間は大変貴重である。



万葉歌碑(黄金神社境内建
立 昭和 29 年 9 月 15 日)

勢いに乗った政府は、黄金調達を確かなものにするため、天平勝宝 4 年(752)、多賀